

# 『言泉集』と『宝物集』の共通説話考

—— 釈迦・耶輸陀羅夫婦因縁譚を中心に ——

永島 裕之

## はじめに

中世の唱導といえ、天台宗の安居院流が名高い。その安居院流唱導の祖・澄憲(一一二六―一二〇三)は、父藤原通憲(信西)と母高階重仲娘の間に七男として生まれた。澄憲は大変弁舌に長け、その才をもって唱導を事とした。その唱導は『尊卑分脉』に「四海大唱導一天名人也」<sup>1)</sup>と記録されている。澄憲は後に子息聖覚とともに安居院流唱導を確立する。

澄憲は祈雨表白をきっかけとして、その名を世に知らしめた。<sup>2)</sup>澄憲の唱導については先に挙げた『尊卑分脉』以外にも、説話や『玉葉』等の史実から窺うことができるように、当時の民衆の心に深く入り込んだ。その澄憲の唱導を現在耳にすることはかなわないが、その内容は『言泉集』や『轉法輪鈔』といった資料から窺い知ることができ、これらは聖覚が澄憲の唱導を記録し編纂したもので、現存するものでは、称名寺二世の釵阿が書写した金沢文庫本が知られる。これらの資料は古くから翻刻・研究がなされており、澄憲

の唱導が大成したところに成立した文学作品に、唱導の痕跡が認められている。その一例として、既に延慶本『平家物語』に多くの安居院の唱導の痕跡が指摘されている。<sup>3)</sup>延慶本成立には多くの安居院の關係者が関わっていることは既に論のあるところである。<sup>4)</sup>当時の影響力を窺わせる事実である。

さらに、同時代に成立の作品として『宝物集』の存在が挙げられるが、そこでも既に多くの指摘がある。具体的には、山田昭全氏らによると、十か所で唱導との関わりが疑われている。<sup>5)</sup>『宝物集』は治承一(一一七七)年の鹿ヶ谷事件により鬼界ヶ島に流された平康頼が著したとされている。『宝物集』の成立について、確かな年代を特定するには至っていないが、第二種七卷本『宝物集』の成立については、小泉弘氏が作中の和歌の所在を調査し『千載和歌集』成立(一一八八)以前であることを明らかにしている。<sup>6)</sup>つまり、康頼の生没年は未詳だが、康頼と澄憲はほぼ同時期に活躍したことになる。康頼が澄憲の唱導の影響を大きく受けた可能性が疑われる。

康頼は赦免され帰洛した後、『宝物集』では「東山ナル所二籠り居テ侍シ」とあり、現在の京都市東山双林寺周辺に籠って、『宝物

集』を執筆したとされる。<sup>7)</sup>この双林寺には念仏聖たちが集まっております、この場所が彼らの情報交換の場であったことが知られる。<sup>8)</sup>やはり、康頼が澄憲の唱導と何らかの形で接する機会があったとしても不思議ではない。

さて、『宝物集』に釈迦と耶輸陀羅女が燃灯仏のために蓮華を供養し、それをきっかけとして二人が契りを結ぶといった説話がある。契りを結んだ耶輸陀羅は、後に釈迦に従って出家し、十大弟子の一人となる羅睺羅を産む。『宝物集』が何からこの説話を採集したのか、有力な情報は挙がっておらず、『今昔物語集』に近似する説話があるということが明らかになっているばかりである。<sup>9)</sup>今回その説話と近似する内容を有する表白を安居院の唱導書である『言泉集』に発見した。そこで小考では、まだ明確になっていない『宝物集』に見られる釈迦・耶輸陀羅夫婦因縁説話の出典を探ることとする。その過程で、先に挙げた『言泉集』と、『今昔物語集』巻一「仏、迎羅睺羅令出家給語第十七」、及びその出典候補として挙げられている『佛説未曾有因縁經』（『大藏經』十七卷）・『釋迦譜』（『大藏經』五十卷）を加えて、六種の仏書・作品を比較する。それによって各仏書・作品の関係性を明らかにし、『宝物集』の因縁譚の出典について私見を述べたい。

## 第一章 釈迦・耶輸陀羅夫婦因縁譚の比較と出典関係

まず、今回新たに発見した『言泉集』と『宝物集』に共通する説話を引用してみよう。なお、同説話は『宝物集』の片仮名古活字三

巻本と第二種七巻本のどちらにも見られるので、両者を引用した。

金沢文庫本『言泉集』<sup>11)</sup>

同尺（夫婦同心修善）

時有一人女人一名瞿夷女一以賣花一爲業一儒童菩薩試到其家一問花有无ク夷答云庭上樹花園中草花稱大王勅一官人點之一但我家後面有一小池生七莖青蓮花一使者不見之一適漏點録一云々菩薩聞之一歡喜語云我有五百金錢一欲買五莖花一女人即許一諾重述其志一云我見大士一深心敬愛願奉此身一永配掃灑一（中略）女人重白大士今買花欲用何事一菩薩答云爲供養世尊一女人隨喜以五莖花一隨價與之一以二莖花一寄託菩薩一爲我供養佛一爾以來一阿僧祇九十一劫於人中天上

世々爲夫婦一未曾相離一

片仮名古活字三巻本『宝物集』<sup>12)</sup>

昔、仏ノ出世シ給シ時、釈迦ト耶輸陀羅女ト、二莖ノ蓮華ヲモトメテ、仏ニ供養シテ、「生々世々ニ夫妻ト成シ」ト契リシ故ニ、願力ニ酬ヘテ、今羅睺（羅）尊者ノ母ト成リ給リ。

第二種七巻本『宝物集』<sup>13)</sup>

昔、定光仏の世に出たまひし時、釈迦如来と耶輸多羅如と、五莖の蓮華をもとめて供養し奉りて、「汝と生々世々妻おとことあらむ」とのたまひしがゆへに、いま羅睺羅尊者の母とあ（る）也。（括弧内は筆者による）

以上、『言泉集』及び『宝物集』から関連する箇所を引用した。詳細な分析は後に行うとして、次に、同様の因縁譚をもつ仏書・作

品の該当箇所を引用したい。なお、成立の古いものから順に該当箇所を引用した。

『佛説未曾有因縁經』

爾時世尊。即遣化人。空中告言。耶輸陀羅。汝頗憶念往古世時誓願事不釋迦如來。當爾之時。爲菩薩道。以五百銀錢。從汝買得五莖蓮華。上定光佛。時汝求我。世世所生。共爲夫妻。(『大藏經』十七卷)

『經律異相』

佛遣化人。空中言曰。汝憶往古誓不。我爲菩薩。以五百銀錢從汝買五莖華上定光佛。汝求寄二華乞世世生處常爲君妻。我語汝言。我爲菩薩一切布施。汝即立誓。世世所生國城妻子乃至自身。隨君施與。何故今日愛惜羅睺。耶輸陀羅霍然還悟如昨所見。愛子稍歇。遣喚目連追相懺謝。

『釋迦譜』

爾時世尊即起化人。空中告言耶輸陀羅。汝頗憶念往古世時誓願事不。我當爾時爲菩薩道。以五百金錢。從汝買得五莖蓮華。上定光佛時。汝求我世世所生共爲夫妻。(『大藏經』五十卷)

『今昔物語集』<sup>14)</sup>

目連ノ云ク、「仏ノ宣ハク、「我レ昔燃灯仏ノ世ニ菩薩ノ道ヲ行ゼシ時、五百ノ金ノ錢ヲ以テ五莖ノ蓮花ヲ買テ仏ニ奉リキ。汝又二莖ノ花ヲ以テ副テ奉レリ」ト。「其ノ時ニ相互ニ誓テ云ク、「世々ニ常ニ汝ト我レ夫妻ト成テ、汝ガ心ニ違フ事非ジ」ト云ヒキ。其ノ誓ヒニ依テ、契リ深ク

シテ今日夫妻ト成レリキ。而ニ今、愚痴ニ依テ羅睺ヲ惜ム事無カレ。出家セシメテ聖ノ道ヲ学シメム」ト。

以上、四種の仏書・作品から関連する箇所を引用した。部分的な引用であるため分かりにくいだが、話の大筋としてはやはり『經律異相』と『今昔物語集』が近い関係にある。『經律異相』と近似する仏書として『釋迦譜』と『佛説未曾有因縁經』が挙げられるが、『經律異相』は「未曾有經上」としている。

続いて各仏書・作品における因縁譚の具体的な構成について言及する。まず『言泉集』は、釈迦が燃灯仏を供養する際に蓮華を買って求め、そこで耶輸陀羅女と出会い、夫婦の契りを結ぶという夫婦因縁譚になっている。一方『經律異相』は、釈迦が羅睺羅を出家させようとするが、その母耶輸陀羅は首肯せず、佛が化人として耶輸陀羅の前に現れ、釈迦と耶輸陀羅の夫婦になった因縁を耶輸陀羅に思い出させ説得するという説話になっている。ただし『今昔物語集』は釈迦が化人として現れるのではなく、目連が神通力を駆使して耶輸陀羅の前に現れ、説得している。では『宝物集』はどうか。片仮名古活字三卷本(以下、片活三本)・第二種七卷本(以下、七卷本)ともに、「声少シ訛リタル法師」が女人成仏のために示した十二門のうちの第五「成仏ト願ヲ起シ」の例として、釈迦・耶輸陀羅の夫婦因縁譚が語られるが、説話はその要点のみを語るに留めている<sup>15)</sup>。さらに、羅睺羅を基点とすれば、『經律異相』・『今昔物語集』は、

羅迦と耶輸陀羅は既に羅睺羅を出産しており、その羅睺羅は出家を求められるまでに成長している。一方『言泉集』にはそういったやりとりは見られず、釈迦と耶輸陀羅の夫婦になるまでの因縁譚となっている。『宝物集』では前述のとおり夫婦因縁譚の要点を語るばかりだが、そこに重きを置いているとみれば、『宝物集』作者は『言泉集』のような夫婦因縁譚を中心とした資料を参考にしていると考えるべきだろう。

## 第二章 釈迦・耶輸陀羅夫婦因縁譚の分析

各資料での因縁譚の展開について先行研究を踏まえて整理したが、続いて各資料間の語句の異同を整理する。便宜上、以下の表を作成し、各仏書・作品の関係性を示した。

まず、仏に供養した蓮華の本数について考察する。『經律異相』は佛が「五莖華」を買い求め、それに耶輸陀羅が「二華」を添えている。『經律異相』成立以前の仏書である『佛說未曾有因縁經』・『釋迦譜』は世尊が「五莖蓮華」を買い求めるのみで、耶輸陀羅は蓮華を添えていない。『經律異相』が『未曾有因縁經』以外の典拠をもつことが疑われるが、それ以後の『今昔物語集』や『言泉集』、片活三本『宝物集』では共通して「二莖（莖）」の蓮華が見られる。つまり、蓮華の本数については、『經律異相』が原拠となりそれ以後の因縁譚を構成している可能性が高いといえる。ただし、『宝物集』は片活三本と七巻本で異同が見られる。片活三本は「二莖ノ蓮華」とあるため、『經律異相』以後の資料が影響していることは疑

者	誓願	誓願	供養	時代	人物	金銭	蓮華	
耶輸陀羅		世世所生 共爲夫妻	定光佛	釋迦如来 當爾之時 爲菩薩道	世尊(化 人) / 耶 輸陀羅 / 羅睺 / 目 連	五百銀錢	五莖蓮華	佛說未曾 有因縁經
耶輸陀羅		世世所生 共爲夫妻	定光佛	我當爾時 爲菩薩道	世尊(化 人) / 耶 輸陀羅 / 羅睺 / 目 連	五百金錢	五莖蓮華	釋迦譜
耶輸陀羅		世世生處 常爲君妻	定光佛	我爲菩薩	佛(化人) / 耶輸陀 羅 / 羅睺 / 目連	五百銀錢	五莖華 / 二華	經律異相 集
陀羅	仏・耶輸 陀羅	世々ニ常 ニ汝ト我 レ夫妻ト 成テ、汝 ガ心ニ違 フ事非ジ ない。	仏	我レ昔燃 灯仏ノ世 ニ菩薩ノ 道ヲ行ゼ シ時	仏ノ耶輸 陀羅 / 羅 睺 / 目 連	五百ノ金 ノ錢	五莖ノ蓮 華 / 二莖 ノ花	今昔物語 集
	(記述な し)	世々爲夫 婦(誓願 として直 成)	世尊	仏ノ出世 シ給シ時	羅(耶輸陀 羅) / 羅 睺 / 羅 (羅尊者)	五百金錢	五莖花 / 二莖花	言泉集
	(記述な し)	生々世々 ニ夫妻ト 成	仏	值燃燈仏 出世	釈迦 / 耶 輸陀羅女 / 羅睺 / 羅	(記述な し)	二莖ノ蓮 華	宝物集 片活三本
	(記述な し)	汝と生々 とことあ らむ	(記述な し)	定光仏の 世に出た まひし時	釈迦如来 / 耶輸多 羅 / 耶輸 / 羅	(記述な し)	五莖の蓮 華	七巻本

う余地はないが、七巻本は「五茎の蓮華」としているため、『經律異相』以前の仏書の影響もあり得る。しかし、七巻本には三巻本の誤りを原拠に立ち戻って訂正する傾向がみられる。<sup>16</sup> その結果、七巻本において「五茎」となるのであれば、元の資料に「二茎」と「五茎」の表記がなければならぬ。したがって『宝物集』は『經律異相』以後の資料を原拠とするのであろう。

ここで、蓮華の本数についての『宝物集』の異同について整理する。そもそも『宝物集』は、釈迦と耶輸陀羅が二人で蓮華を買い求めたとしている。他の資料では、耶輸陀羅は蓮華を買ってはいないので、その時点で他の資料との隔たりがある。さらに二人合わせて片活三本は「二茎」、七巻本は「五茎」としている。つまり、片活三本は『經律異相』・『今昔物語集』・『言泉集』で耶輸陀羅が添えた得とする数に、七巻本は『宝物集』以外の資料で釈迦が買い求めたとする蓮華の数になっている。この点については後に他の点とともに改めて言及することにする。

次に、蓮華を購入する際の金銭について、『未曾有因縁經』と『經律異相』はともに「五百銀錢」とし、『釋迦譜』・『今昔物語集』・『言泉集』は「五百金錢」（『今昔物語集』は「五百ノ金ノ錢」としている。若干の差異が認められるが、これらは同文とみて問題ないだろう。しかし、『宝物集』は片活三本・七巻本ともに金銭について明記していない。この点についても後に改めて考察したい。

続いて人物だが、『未曾有因縁經』・『釋迦譜』・『經律異相』・『今昔物語集』は話の大筋が酷似していることは前述したが、登場人物として釈迦十大弟子の一人である「目連」が現れているところでも、

他の作品とは異なる。ただしこれも前述したように、『今昔物語集』では耶輸陀羅を説得するのは「目連」である。この点は説話として口承された過程での変化ともとれる。一方、『言泉集』・『宝物集』は先の資料とそもそも説話が異なるため、「目連」が登場していないが不自然ではない。『言泉集』と『宝物集』では表記の差異があるが、人物の面ではさほど違いが認められない。

釈迦と耶輸陀羅が供養した対象は、各資料間でやはり表記の差異はあれども、同一とみなしておく。なお、七巻本『宝物集』には記述がないが、「定光仏の世に出たまひし時」とあるところから、定光仏を供養したと記述されていたものと思われるが、編集の際に脱落したのだろう。

最後に、蓮華を購入した釈迦と耶輸陀羅の誓願だが、『言泉集』が釈迦と耶輸陀羅の誓いとしてではなく、第三者的立場から「世々爲夫婦」としていることを除けば目立った差異はないように思われる。ただし、契りを結ぼうとしているのは、『未曾有因縁經』・『釋迦譜』・『經律異相』は「世尊」であるのに対して、『今昔物語集』は釈迦と耶輸陀羅の二人がともに誓いを述べたとしている。『宝物集』は片活三本・七巻本ともに直接的な主語は明示されておらず、誓いを立てたのは耶輸陀羅とも、あるいは『今昔物語集』のように釈迦と耶輸陀羅の両者ともとれる。他の資料とは違い、意図的に明示することを避けているようにもとれる。

以上、各資料間での語句の異同を整理した。結果として『佛説未曾有因縁經』・『釋迦譜』が直接『宝物集』に影響したとは考えにくく、一方、それらと近い関係にある『今昔物語集』の因縁

譚にまつわる箇所では、『宝物集』の因縁譚を構成することもできそうだ。しかし、『宝物集』の出典として『今昔物語集』を想定することについては、山田昭全氏は、『宝物集』の典拠として『今昔物語集』を挙げても、『経律異相』等とも重複するため、すぐに出典とみなすことは難しいとしたうえで、「現存今昔物語は中世にはほとんど流布しなかったという説が有力視されることも考慮して、今のところ今昔物語は宝物集の出典とはならなかったということにしておきたい」と述べている。<sup>17)</sup>

したがって『経律異相』か『言泉集』を典拠とし得る可能性がより高まるわけだが、その根拠として、まず『宝物集』における因縁譚の構成を元に言及したい。六種の仏書・作品を比較して見えてくる『宝物集』における釈迦・耶輸陀羅夫婦因縁譚の特徴は次のようにまとめられる。

- A 釈迦と耶輸陀羅の夫婦因縁譚に主眼を置く。
- B 蓮華の数を片活三本は「二茎」とし、七卷本は「五茎」とする。また、片活三本・七卷本ともに釈迦と耶輸陀羅の二者で購入する。
- C 蓮華に支払った金銭についての記述はない。

右に挙げた点から、『宝物集』を著したとされる平康頼は、本文構成の際に典拠となる資料を手元に置いていなかったのではないかと考えられる。手元に典拠となる資料を置いているのであれば、このような異同は起こりえないのではないだろうか。

では康頼はこの因縁譚をどのようにして知り得たのか。康頼の生活環境からして、前述した双林寺の念仏聖の存在を無視できない。双林寺に集う念仏聖たちを情報源として、耳にした説話を康頼が『宝物集』に反映させたと考えるのが穏当だろう。そして念仏聖たちは安居院の唱導を介して、つまり今回示した『言泉集』の表白をもとにした唱導を聴いて、そのうえで因縁譚を語っていたのではないだろうか。なお、康頼自身鹿ヶ谷事件以前に澄憲の唱導を耳にしていた可能性もある。しかしそれを証明する資料は見られない。よってここでは念仏聖たちを介した安居院の影響を想定することとしたい。

ここで注意を要するのは、『言泉集』が説草資料であるということである。つまり実際に書かれたとおりには語ってはいなかったということである。かつて筑土鈴寛氏が唱導を「表白体の唱導、口頭の唱導」に区別したが、この『言泉集』は「表白体」の説草に当たる。そのうえで例えば永井義憲氏が次のように述べている。

さてこの表白体文章が、荘重な僧侶たちの動作や振鈴、鐺鉢の響き、読経の合唱などにはさまれてあるいは低く、あるいは堂々と力強く読みあげられていく法会のなかで、最後に最も長時間にわたって行われるのが説法である。その内容はその法会の趣旨、内容によって千変万化するのだが、これは書き記された文章を読み上げるのではなく、説教者の力量に応じた表現が多かった。<sup>19)</sup>

ここから唱導とは、導師によって自在に口頭で語られるものであ

ることが知られる。『言泉集』も同様にそこに記されている漢文体の表白がそのまま読み上げられたわけではない。聴衆の耳にはその都度変化した表白が入っていく。したがって、康頼の採集した釈迦と耶輸陀羅の夫婦因縁譚が他の資料と食い違うのは必然である。とすると『経律異相』を元と仮定するより、『言泉集』を元とした唱導の影響を仮定する方が、『宝物集』での蓮華の本数の揺れを説明するにあたって、自然であろう。よって、『宝物集』の釈迦・耶輸陀羅夫婦因縁譚の典拠として安居院の『言泉集』を第一に踏まえるべきであろう。

## おわりに

以上、六種の仏書・作品の関係について私見を述べた。改めてまとめると、『宝物集』における釈迦・耶輸陀羅夫婦因縁譚の原拠として、安居院の唱導書である『言泉集』が最も有力な説だと言える。ただし、『言泉集』は「表白体の唱導」資料であり、これそのものを見て康頼が『宝物集』に組み込んだというわけではない。それを元とした唱導を聴いた念仏聖をあくまでも仲介しての間接的な影響である。『宝物集』の作者とされる平康頼と澄憲の活躍する時期は重なる。また、康頼が帰洛後、念仏聖の集まる双林寺の近辺で生活していたことも、両作品の影響関係を考察するとき、無視できない事実であろう。

ただし注意を要するのは、澄憲もなんらかの資料を参考にして説草を構成していることである。今回の釈迦・耶輸陀羅因縁譚の出典

については不明である。これに限らず、唱導と文学の関係性を探るうえで、導師の語りが何か基づいているという事実は常に念頭に置かねばならない。『言泉集』に見られる因縁譚は何かから採集したのか、それを明らかにする資料が発見され次第、また改めて『宝物集』との関係を考察しなければならない。

とはいえ、今回明らかにした『宝物集』と『言泉集』の関係は、『宝物集』の注釈において未だ指摘されていないところである。さらに、このほかにも指摘のされていない『宝物集』と安居院の唱導資料の関係があることを突き止めたが、またの機会を待ちたい。いづれにせよ、『宝物集』と、あるいは平康頼と安居院の関係は現在知られている以上に根深いものかもしれない。

## 【注】

- (1) 黒坂勝美・國史大系編修會編『尊卑分脈』第二篇（國史大系第五十九卷、吉川弘文館、二〇〇一年二月）四九二頁。
- (2) 澄憲の祈雨表白については、三宝院表白集、東大寺宝菩提院『公請表白』、『源平盛衰記』卷第三「澄憲祈雨三百人舞」、『古事談』卷第三・七九等を参照。
- (3) 小林美和「延慶本平家物語の性格——寿祝と唱導の文芸——」(伝承文学研究会『伝承文学研究』第二十号〈三弥井書店、昭和五十二年六月〉所収)、同氏「延慶本平家物語の編纂意図とその形成圏について」(武久堅『日本文学研究大成 平家物語Ⅰ』(国書刊行会、平成二年七月)所収)を参照。
- (4) 牧野和夫『平家物語』(新潮古典文学アルバム13、新潮社、平成

二十三年九月) 三六頁。

(5) 山田昭全・大場朗・森晴彦編『宝物集』(おうふう、一九九七年四月) 頭注。

(6) 小泉弘・山田昭全・小島孝之・木下資一校注『宝物集 閑居友比良山古人靈託』(新日本古典文学大系40、岩波書店、一九九三年一月) 解説。

(7) 『平家物語』 卷第三「少将都帰」 参照。

(8) 谷口耕一「西行物語の構想 ― 虚像西行形成の構造について―」『語文論叢』(第七号、千葉大学文学部国語国文学会、一九七九年九月)、谷口広之「説話伝承と平家物語の構想 ― 鬼界島流人譚をめぐって―」(同志社国文学 第十七号、同志社大学、一九八一年三月) 参照。

(9) 注(6) 頭注。

(10) 山田孝雄・山田忠雄・山田英雄・山田俊雄校注『今昔物語集 一』(岩波書店、昭和五十年八月) 八六頁頭注。

(11) 永井義憲・清水宥聖編『安居院唱導集 上卷』(角川書店、一九七二年三月)

(12) 山田昭全・大場朗・森晴彦編『宝物集』(おうふう、一九九七年四月)

(13) 小泉弘・山田昭全・小島孝之・木下資一校注『宝物集 閑居友比良山古人靈託』(新日本古典文学大系40、岩波書店、一九九三年一月)

(14) 今野達校注『今昔物語集 一』(新日本古典文学大系33、岩波書店、一九九九年七月) 四九〜五三頁。

(15) 因みに、大島薫氏は「化人の語る仏道教化 ― 『宝物集』の構想―」(國文學、関西大学国文学会、二〇〇七年三月) で、「声少シ訛リタル法師」について、「本作品に明かされる仏道教化が『声少し訛りたる法師』すなわち異国から渡ってきた僧によって営まれたものであると、さらに言うとするれば、清涼寺に安置される釈迦像の化人によって営まれたものであると読み取るとともに、本作品が「一夜の不思議」を描いた「物語」であったことを知るわけである」と述べ、法師を化人としている。大島氏の指摘に従うならば、『宝物集』も化人によって語られたことになる。その意味で、『宝物集』は『佛説未曾有因縁經』・『釋迦譜』・『經律異相』と共通する。

(16) 大場朗『宝物集の研究』(おうふう、二〇一〇年三月) 参照。

(17) 山田昭全「宝物集の仏典受容 ― 仏教の日本化の一過程―」(『東西における知の探究 ― 峰島旭雄教授古稀記念論集―』(北樹出版、一九九八年一月) 所収)

(18) 筑土鈴寛『中世藝文の研究』(有精堂出版、昭和四一年二月)

(19) 永井義憲・貴志正造編『日本の説話 第三卷 中世I』(東京美術、昭和四八年一月)